いちかわ新聞
2015.11/6
No.607
発行／株式会社 明光企画 〒272-0143 市川市相之川3-2-13 TEL 047-396-2211
10830469(03)

看取りのできる「終の棲家」をもっと

常識にとらわれない高齢者住宅づくり

株式会社シルバーウッド代表取締役 **下河原忠道**さん（44歳）

「第3回アジア太平洋高齢者ケア・イノベーション・アワード」がシンガポールで開催され、㈱シルバーウッドが運営するサービス付き高齢者向け住宅（サ高住）「銀木犀」が最優秀賞を受賞した。認知症予防などの取り組みが評価されての受賞だった。

入居者が活躍する場をつくった

2015年10月現在、サ高住「銀木犀」は市川市内の1棟を含む全6棟。今後は江東区や浦安市にもオープン予定で、「30棟を目指す」と下河原さんは意欲を見せる。

もともと鉄鋼関係の仕事をしており「異業種出身だからこそ、既成概念にとらわれない事業ができた」と話す。

たとえば、イノベーション・アワードで評価された「入居者のドラムコミュニケーションプログラム」。ドラムを叩くことで表現の楽しさや、人と演奏する楽しさを味わい、筋肉も刺激される認知症予防・改善プログラムだ。高齢者住宅の入居者は「パフォーマンスを見る側」になりがちだが、銀木犀は違う。ドラムサークルの参加者が地域のお祭りなどに出演し、熱いパフォーマンスで喝采を浴びている。

鎌ケ谷や西新井大師の銀木犀では地域に開かれた駄菓子屋を併設。認知症の入居者も店番をするが「たまにお菓子を食べちゃうことがある」以外はトラブルもなく、子どもたちとの交流も盛んになった。今では近所の子どもたちが友だちを誘って遊びに来る「たまり場」だ。

勢いで飛び込んだ高齢者住宅運営の世界

下河原さんと高齢者住宅との出合いは約7年前にさかのぼる。当時㈱シルバーウッドでは、スチールパネル工法でのローコストな高齢者住宅建設を提案していた。

「初めは建設だけだったんだけど、あるとき営業先の地主さんから『運営もやってみなよ』と言われて、二つ返事で『やります！』って（笑）」

運営にあたり、国内外の施設を視察、日本の高齢者が置かれている現状に疑問を抱いた。

「多くの人が住み慣れた家で最期を迎えたいと願っているのに、現状は大部分の人が病院で亡くなっている。病院でたくさんのお年寄りが経管栄養のチューブを付けて寝かせられている姿に、ショックを受けました」

入居者が教えてくれた「自然な最期」

初めて運営した高齢者住宅に、開所間もなく余命3カ月と宣告された末期癌の患者Tさんが入居してきた。「彼女、『私はここで死ぬ』って言うんです」

日本の終末医療に疑問を感じていたとはいえ、高齢者住宅の運営はまだ始めたばかり。看取りの経験もなく不安になる下河原さんに、Tさんは「私が死に方を教えてあげる」と言った。聞けば、地域の病院に看護師長として長年勤めた女性だったという。

「亡くなるまでの間、彼女は身をもって看取り援助の仕組みを教えてくれました。死ぬのを待つだけではなく、人生最期の日々を豊かに生きていた。私たちもご家族も、Tさんと一緒に楽しい時間をたくさん過ごしました」

そして迎えた死は、まるで花が枯れていくように自然なものだった。

看取りのできる高齢者住宅をもっと

Tさんと出会って、下河原さんのサ高住運営の軸は決まった。

過剰な医療はしない。安心して、自然な最期を迎えることのできる場所をつくる。最期を迎えるその日まで、自由に楽しく暮らしてもらう。

「『あそこに行けば最期まで生き生きと暮らせる』というところがあれば、安心でしょ？ 日本にそんな終の棲家を作っていかないと」

銀木犀のブログを見ると、入居者がとてもいい笑顔を見せている。この笑顔が、銀木犀のすべてだと思う。

顔（ひと）

profile

1971年生まれ。父親の経営する鉄鋼会社に勤務後、2000年に株式会社シルバーウッド（浦安市）設立。高齢者向け住宅・施設の企画・開発事業のかたわら、サ高住「銀木犀」を開設。介護予防から看取り援助まで行う「終の住処」づくりを目指す。一般財団法人サービス付き高齢者向け住宅協会理事。

授賞式での一コマ